

メカつく用企画書

●タイトル●

「暁光のディーンドライブ」

●テーマ ●

君となら、どこまでも飛べる。

- ・「空を飛ぶロボットものの主人公が高所恐怖症である」という斬新さ
- ・メカと人間の間で育まれる絆
- ・信じ合い支え合うことで、様々な問題を克服できる強さを得られること
- ・人間の身勝手さとそれに対する報い、復讐や憎悪の連鎖の解決

●ジャンル●

- ・近未来風 SF/ロボットアクション/リアル系ロボット

●設定●

わたしたちの住む世界とは、“ほんの少し” 違う世界。
空が「白く薄い膜」で覆われた世界。
空がその「膜」で覆われていることが当然の世界。
空がその「膜」で覆われていることを、忘れてしまった世界。

◆世界観・あらすじ

未来。様相は私たちの世界より多少技術が発達している程度だが、実は私たちの世界がテクノロジーを発達させ滅んだ後再構築された、遠い未来の世界である（この世界でいう「古代文明」は、私たちにとっての近未来にあたる）。またその空は白く薄い膜で覆われており、人々はそれを当然のものとして受け入れている。膜の影響で飛行機などは上空を飛ばず、この世界では航空系の技術が発達していない。この世界の人々にとって世界は青空で完結しており、宇宙の存在は神話や絵空事のように扱われている。

地球に浮かぶ小さな島国トリニシア。その上空から、ある日突然グロテスクな化け物が飛来してきた。人々は、古代遺跡から発掘した巨大人型機動兵器”ディーンドライブ”と、それに搭乗し操縦する人々”アストロノーツ”の力でそれらを退けたが、**グラゼ**という街がひとつ壊滅するほどの被害を受けた。この事件を人々は**“空が割れた日”**と呼び、化け物たちを**ガリオン**と呼んだ。倒されたガリオンの身体からは結晶体が採取された。様々な実験の結果、これに電流を通すと反重力エネルギーを放出することが分かった。この結晶体を人々は**ケーバライト**と名付け、ディーンドライブに搭載することで戦力の増強を図った。

ガリオンの襲撃は不定期だったが、その度に**軍事企業サイクス**が中心となってディーンドライブを出动させ、多くの犠牲と損害を払いながらも撃退・討伐していた。しかしこのままでは罅が開かぬと、研究者たちは古文書を元にケーバライトを最大限に有効活用するディーンドライブの建造に着手した。

その名前は**ルクス**。“空が割れた日”の3年後、彼はコックピットに侵入してきた少女、**アスナ・セオ**の声で目覚める。はじめこそ息の合わなかった二人だが、様々な困難、失敗、悲しみを共に経験していくことで、次第に心を通わせ、互いが互いを必要とし支え合うような強い絆で結ばれる。

ガリオンの目的とは？ 「我らは元は同じだったのだ」とルクスに語った**エレボス**の言葉の意味とは？ ルクスとガリオンたち、そして人間との関係は？ 多くの謎とその答えに戸惑いながらも、アストロノーツはガリオンの侵略を根絶すべく、割れた空の向こう、宇宙へと赴く。

◆用語解説

・トリニシア

小さな島国。イメージは日本。四季があるが、基本的に温暖な気候。国家規模はそれほど大きくないが、数十年前に古代遺跡からディンドライブが発掘されてから、経済的には世界トップレベルまで上り詰めた。”空が割れた日”以後はガリオンに対抗するために戦力の増強に積極的に取り組んでいる。

・ディンドライブ

数十年前、トリニシアの遺跡から発掘された巨大人型機動兵器。また、それを元にして現代で作られたもの。大きさはそれぞれだが、平均的には8~10mほど。戦争の道具として使われたこともある。

古代文明の遺産と思われるが、その科学力は現代のもの比ではなく、この登場によって世界は大きな変革を遂げた。民間には出回っておらず、各国の軍や自衛隊が所有するのみである。

ディンドライブという名前は、発掘された兵器の電子回路に刻まれていたもの。元々は古代人がケーバライトの利用を前提に設計した兵器だった。

・アストロノーツ

ディンドライブに搭乗し、それを操縦する人々のこと。私たちの世界でいうパイロットや軍用機の操縦士にあたる。古代語で「空の果てを見る者」の意らしい。この名前もまた、発掘された兵器の電子回路に刻まれていたもの。

・ケーバライト

ガリオンの体内で生成される結晶体。電流を流すことで大量のエネルギーを放出する。またその際、反重力エネルギーを帯びる。色はガリオンによってさまざま。生じるエネルギーはその体積に比例。模造品の開発も進められているが、希少なため一般へはほとんど流通していない。

その正体は古代文明の人間が生み出し、手に負えなくなったため宇宙に廃棄した結晶型生命体。ガリオンを内側から操作し、地球を襲っていた。

一体のガリオンに寄生している程度の大きさでは簡単な命令しかこなせないが、結晶が大きくなるに連れ複雑な処理や行動も起こせるようになる。また一定以上の大きさになると自我を持つ。

(なお、寄生先が破壊、死亡すると、受けていた命令はリセットされる。

リセットされるのは命令のみ。意思が生じていた場合、それはリセットされない。また意思がなくとも成長後に意思が芽生えた際、リセットされた命令を思い出す可能性もある)

彼らの目的は、復讐と安住の地。

廃棄された後、その多くは小惑星と激突して消滅したり惑星の引力に引かれて燃え尽きたりしたが、いくつかは長い年月をかけて宇宙をただよい成長、自我を持つに至った。自我を持った彼らは己たちが何故真っ暗な空間に漂っているのか理解できないまま、数少ない同胞と共に当てのない旅を続けた。孤独に耐えながら彼らは記憶をまさぐり、かつて人間に棄てられたことを思い出す。

自分たちを生み出し、棄てた人間に対する怒りと憎しみ。親を求める子の悲しみ。長年の孤独を癒せる安らぎの地が欲しいという願い。それらが彼らを破壊という復讐へと駆り立てた。

彼らは己の体の一部分を切り離し、様々な宇宙生命体に組み込んでそれを支配。破壊命令と共に地球に送り込んだ。一度に攻め込まなかったのは重力下での活動データを取るためと、何度も繰り返し攻め込まれたほうが負担になるため。つまり人間への嫌がらせ。

・"空が割れた日"

ガリオンが空の膜を破って襲来してきた日のことを、人々は畏怖を込めてこう呼ぶ。グラゼを中心に多くの犠牲を出した悲惨な事件として、今も人々の記憶に暗い影を落とす。またこの日以後、グラゼの上空には亀裂が走り、ところどころ本当の空の深い青が覗いている。

・空の膜

地球を覆っている、白く薄い膜。半透明で、ホログラムのように微かに光る。この世界の人々にとってはあって当然のものだったが、"空が割れた日"によってそうではなくなった。

元々は、古代人がケーバライトの復讐を懼れて張った強力なバリア。

・ガリオン

ある日突然空を破って飛来してきた地球外生命体。その外見は古代生物や深海生物のよう。外見も性質も大きさも多種多様だが、みな体の一部にケーバライトを埋め込まれている。"空が割れた日"以後、グラゼ近辺に繰り返し飛来して破壊活動を繰り返す。いわゆる雑魚敵。

・エレボス

稀に出現する、ディーンドライブによく似た外見のガリオン。高い破壊力を有し、人々は未だこれに勝てていない。ガリオン同様破壊行動を繰り返し、ある程度活動すると去って行く。序盤ではエレボスが出現すると、人々は撃退や討伐ではなく被害を食い止めることに集中することになる。いわゆる中ボス。その正体は、成長し意思を持ったケーバライトらがむき出しの自分たちを守るために、記憶を元にディーンドライブを模って武装した姿。古代文明の人々が廃棄したもの(デブリ)の寄せ集めでできている。

・旧市街グラゼ

トリニシアの首都から 300 km ほど離れた場所にある市街。かつては住宅地として賑わっていたが、"空が割れた日"にガリオンが襲来、破壊行為を行ってから閑散としてしまった。事件後すぐはホームレスや不良のたまり場となっていたが、ガリオンの襲来を懼れて今では誰も近寄らない。

実は古代にケーバライトの開発施設があった場所であり、そのため復讐のための第一目標に選ばれてしまった。また地下の古代遺跡には空の膜を発生させている装置がある。

・新市街リバル

旧市街グラゼから 70km ほど離れた場所にある市街。学校や店もありそこそこ活気があるものの、いつ来るかも知れない脅威に怯えて暮らしている。元々は小さな田舎だったが、グラゼからの避難民を受け入れるために開発を進めた結果、今のような立派な市街地となった。

・軍事企業サイクス

グラゼから 15km ほど離れた場所にある民間軍事企業。また、そこを拠点に建てられたガリオン襲来対策本部(規模や設備の都合上、首都にある対策支部が事実上の本部である)。ディーンドライブとアストロノーツを複数所有する。元々は自衛や軍力の海外派遣を請け負っていた中小企業だったのだが、運悪くグラゼの傍という最前線に立地していたため、政府からガリオンと戦う勅令を与えられてしまった。ガリオンの侵攻を食い止めるべく、国内外から有力なアストロノーツやディーンドライブが集められつつある。またケーバライトの分析、研究や精製も行っている。ガレージにてルクスを建造していたが、ひょんなことからアスナがそのアストロノーツに登録され、何故か取り消すこともできなくなってしまったため、止むを得ず彼女を編入する。



◆キャラクター：人間

「あたし。仲間意識とか、そーゆーのないから」

アスナ・セオ

リバル仮設中学校 2 年の女子生徒。14 歳。かつてはグラゼに住んでいたが、三年前の"空が割れた日"に家をガリオンによって破壊された。その際に母親もガリオンに殺害された（本人はショックでその瞬間のことを忘れていた）ため、家族構成は父親のみ。近頃父親に再婚の兆しがあり、少々荒みぎみ。家庭からの逃避を兼ねて、母親との思い出があるグラゼの家の跡地にはたまに出向くのだが……。

実は高所恐怖症であり、また体に G がかかることが大の苦手。このことが彼女のサイクス生活の大きな足かせとなる。

序盤ではルクスやサイクスを拒絶し激しく反発していたものの、次第に責任を受け入れサイクスと共に歩む覚悟や高所恐怖症に立ち向かう決意を固める。母親と同種のガリオンと対峙した際にトラウマから完全に周囲を拒絶するが、仲間の呼びかけやルクスの支えで乗り越え、またこれを機にルクスとの絆を深めて高所への恐怖心を薄らげる。オリトの撃墜などといった辛い経験を乗り越え、彼女は次第に一人前のアストロノーツへと成長する。

宇宙での最終決戦後、ルクスと別離するも「ルクスもケーバライトも、こんな暗いところに置き去りになんてしない」と再会を約束。数年後、己の力で高所恐怖症を克服し宇宙飛行士（アストロノーツ）となった彼女は、再び宇宙に赴く。

「ハイ、美味とこ取りのオリト君でーす！」

オリト・スラックス

サイクス所属の男性アストロノーツ。比較的若い様々な戦場を経験しており、その実力は折り紙つき。フランクだが気遣いのできる性格で、サイクスに馴染もうとしないアスナを何かと気に掛ける。左腕は義腕。搭乗機のオルトロスとは付き合いが長く、完璧に乗りこなしている。アスナも彼のことを兄のように慕っていたが、対エレボス戦でアスナを庇って撃墜され、そのまま行方不明に……。

「俺はお前を認めない」

レン・ハヤミ

トリニシア首都から派遣されてきた優秀な少年アストロノーツ。16 歳。ルクスのアストロノーツになる予定であったが素人のアスナにその席を横取りされてしまったため、アスナに対して何かとつかかかる。後に彼女とはよきライバルに。ルクス開発後設計された、量産型ディーンドライブに搭乗する。

「獲ってきなさい。“アンタだけの空”ってヤツを」

トモコ・ニノ

サイクスに所属している凄腕メカニックの女性。"空が割れる日"以前から「空にある薄い膜」の存在に気づいており、その向こう側に行くことを夢見ていた。祖父の遺した設計図を元に 5 年かけて 1 からディーンドライブを作り上げるなど、根気強いところがある。彼女の祖父は他にも多くの設計図・古文書を所有しており、ルクスもここで見つかった設計図をもとにして建造された。

他、個性豊かな戦闘員・非戦闘員が所属。

◆キャラクター：メカ

《私を暗闇から掬いあげてくれたのは、あなたなのです》

ルクス

ケーバライトの力を最大限に引き出すために開発された最新のディンドライブ。全長約9m。大天使をモチーフとしたようなデザイン。ガリオンとの戦闘で取得されたケーバライトを集め、巨大なひとつの結晶にしたものがコアに使われている。AIがまだセットされていない状態で起動したためアストロノーツとの意思疎通はできないはずだが、ままならないものの意思があるかのような動きを見せ、アスナが精神的に成長すると共にやがて明確な自我を見せはじめる。ちなみにAI(?)は男性。なお、辞書機能だけはインストール済みであった模様。ケーバライトから大量のエネルギーを取得し、それを最大限に運用して戦う...はずなのだが、搭乗者であるアスナが未熟であるため真価はなかなか発揮されない。

近遠両面での活躍が期待できる、半自律飛行小型戦闘機「エンジェルハイロウ」を5機装備している。中盤にケーバライトの真実が発覚した際、己の自我がケーバライトから来ていることと人間への憎悪を思い出し暴走、アスナを殺害しかけまた拒絶するも、彼女から揺るぎない信頼を寄せられていることを知り、ケーバライトとしてではなくルクスとして戦い続けることを決める。

終盤は決戦に向け、宇宙はどういう場所かといった情報をサイクスにもたらした。最終決戦後はケーバライトたちの孤独を和らげるために宇宙に残ることを選び、脱出装置からアスナを逃がす。その際ケーバライトとしての記憶内にあった、空の膜を解除するためのキーをアスナに託した。

《おはようございます。昨晚はよくおやすみになりましたか?》

オルトロス

オリトの搭乗機。三つ頭の犬をモチーフにしたデザイン。逆間接を活かしたジャンプ力で以て、ダイナミックかつスピーディーな接近戦を得意とする。最新型ではないものの最前線での戦闘に対応するためにケーバライトが組み込まれており、跳躍力の強化に一役買っている。ケーバライトで足場を作るため空中戦にもある程度対応できる。AIが備わっており、その声は女性のもの。冷静ながらも優しい性格だが、オリトにだけはかなり手厳しい。しかしその手厳しさもまた、信頼の裏返しである。

《本日ノ天気は晴レ。気温ハ20度。マズマズノオ出カケ日和一》

リット

トモコが作成したケーバライト運用実験機。古い文献にあった「未確認飛行物体」(UFO)をモチーフにして、球体に円盤を組み合わせたデザインをしている。簡単なAIを搭載されており、無邪気で好奇心旺盛な性格。サイクスのマスコットの存在。

ちなみに円盤には情報を投影する機能があり、日付や時間、天気などを表示することができる。

《痛みを忘れた愚か者が……己の盲目を恨むがいい》

ニュクス

凄まじい大きさのコアを持つケーバライト。意思を持つケーバライトの中でも最大の大きさ。声は女性



的。ルクスとよく似た黒い装甲で武装している、ケーバライトたちの親玉（ラスボス）。なお、この武装はルクスの元となった設計図を参考にして作られている。つまり、ルクスとは作り手の違う姉妹機のようなもの。



● あらすじ (60分) ●

全12話30分アニメの1話と2話を

想定して構成。ケーバライトの真実など物語の核心には触れず、あくまで導入部分のみ。

物語として完結させるより、これから始まる、動き出すというワクワク感を煽ることに焦点を当てる。

放課後、近未来のような街中を歩くセーラー服の少女、アスナ。笑顔で日常を過ごす人々とは対照的に憂鬱な顔で、人の流れとは逆の方向に歩みを進める。彼女はやがて壊滅した街・グラゼに到着する。誰もいない瓦礫の街を迷いのない足取りで歩くアスナ。彼女は真っ直ぐ自分の家の跡地へ向かい、そこで”空が割れた日”のことを回想する。その帰り道、彼女は突然襲来したガリオンに襲われる。

やっとの思いで逃げ込んだ先のガレージで、アスナは開発中のディンドライブ・ルクスと出逢う。整備中だったためか、解放されていたコクピットに転がり込み「助けて」と繰り返し願ったとき、セットされていないはずのAIが反応。ルクスが起動し、アスナをアストロノーツとして承認、自律的に応戦するような動きを見せた。しかしその動きは緩慢かつ無駄が多く、またアスナも操縦方法が分からないため、動きをコントロールできない。危ないところで、オルトロスに搭乗したオリトが現れてガリオンを追い払ってくれる。救出されたアスナはこれで帰れると安堵するものの、アストロノーツの承認が解除できない。ルクス是对ガリオンの切り札であるため易々と切り捨てることもできず、アスナはサイクスに編入することになってしまう。(30分)

編入後、操縦訓練やシミュレーターによる実技テストを受けるアスナ。しかし、どの成績も最低評価。気遣ったオリトに対し、アスナは自身が高所恐怖症であることを打ち明ける。突然背負わされた責任の重さを認識できないアスナは反発し、サイクスとルクスを拒絶。しかしそんな中でもガリオン襲来の警報が鳴り響く。先日のエレボス襲来の影響で殆どのディンドライブが整備中であったため、覚悟の決まらぬままアスナもオリトと共に出撃することになってしまう。

案の定発進の段階から萎縮してしまい、戦闘どころか動くこともままならないアスナ。それを庇いながら立ち回るオリト。アスナは悪態をつきルクスに苛立ちをぶつけるが、ルクスは何も応答しない。そんなとき、アスナは逃げ遅れた子供がすぐ傍にいることに気付く。子供の姿にかつての自分を見たアスナは、恐怖よりも先に護らなければと動く。しかし訓練を真面目にやっていたせいであり、混乱して思うように動けない。子供の目の前にガリオンが迫ったとき、アスナの「あの子を助けて」という強い願いに呼応するように、ルクスが再び意志のあるような動きを見せ、ガリオンと対峙する。余裕を取り戻したアスナも拙いながらルクスを操縦。オリトのサポートもあり、なんとか子供を護りガリオンを撃破することに成功する。安心した途端恐怖がぶり返したアスナは「こんなのもうこりごりだ」とこぼすが、しかしルクスが自分の思いに応えてくれたことや、自分の力で誰かを護れた実感に確かな喜びを覚えているのであった。

その後サイクスに撤収するアスナとオリトを、険しい顔で遠くから眺める一人の少年（レン）。アスナを待ち受ける困難を予感させつつ、メ。(30分)